学位論文要旨

吃音のある子どもを持つ父親・母親の養育過程に関する研究

－養育における夫婦の協働感・相互協力と専門家の介入が及ぼす影響について－

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻　学習開発学分野
特別支援教育学領域

D174329　　堅田　利明

論文要旨

序論

本研究の目的

本研究の方法と構成

第1部　吃音のある子どもを持つ父親・母親の養育過程に関する研究－グループ・インタビュー法による養育過程の心情と、専門家の介入、親の会参加が及ぼす影響の質的分析－（第1研究）

解釈学的現象学によるグループ・インタビューにおける質的研究（第 1 研究）

第 1 研究の考察

第2部　吃音のある子どもを持つ父親・母親の養育態度に関する研究－質問紙調査による養育過程の心情と、専門家の介入、親の会参加が及ぼす量的分析－（第2研究）

質問紙調査による量的研究（第 2 研究）

第 2 研究の考察

第3部　総合考察と今後の課題

混合研究による考察

今後の課題

引用文献

序論

本研究の目的

近年、吃音に対する支援の在り方については多面的・包括的にアプローチをすることが重要(小林・川合，2013)とされており、幼児期から学童期・思春期は環境調整法、情緒・心理面へのアプローチ、スピーチへの直接的介入、認知行動療法(川合，2010)等がある。このうちの環境調整法(鈴木・小澤，2001)は、その重要性と効果が指摘されるなかで(原，2005; 見上，2008; 坂田，2011)、具体的な内容はいまだ未整理で、専門家が独自の見解と方法によって実施しているのが現状である。また、保護者支援を側面から支える「親の会」の役割も大きい。

吃音のある子どもの父親・母親に対する先行研究は、吃音のない父親・母親との養育態度や親の信条、社会的・経済的差異、発話速度の比較検討(Darley, 1955; Goodstein, 1956; Goodstein & Dahlstrom, 1956; Johnson, 1959; Kelly & Conture, 1992; Morgenstern, 1956; Yairi, 1997; Meyers & Freeman, 1985a,b; Zenner et al, 1978)や、有田・平野(2020)による半構成的面接の質的分析などがある。しかし、吃音の受け止め方や心情に父親・母親で一致する部分とずれがあるかどうかについては明らかにされておらず、また、検討されていない。本研究では、グループ・インタビュー法で得られた父親・母親の「生の声」について解釈学的現象学による質的分析を行い、さらに、普遍性を導き出すために質問紙調査による量的分析を加え、両分析結果を統合して推論を導き出す混合研究法(Creswell & Clark, 2011)による検討を行った。本研究の成果は、吃音相談・臨床の場において保護者支援を行う上での助言・指導に応用できるものと考える。

本研究の方法と構成

吃音のある子どもの父親・母親の養育過程における心情についての6つの研究設問として、①父親・母親は子どもの発吃をどのように受け止めるのか、②父親・母親は吃音症状の進展によって変容していくわが子の姿をどのように受け止めるのか、③父親・母親は継続する吃音症状と自身の養育態度についてどのように考えるのか、④父親・母親は吃音のある子どもを養育する過程において罪悪感情や孤立感を覚えるのか、⑤吃音のある子どもを養育するにあたって父親と母親は異なる悩みがあるのか、⑥父親・母親に専門家の介入や親の会参加はどのような影響を与えるのか、立てた。研究設問それぞれに、①わが子の発吃の受け止め方に父親・母親間で違いはないのではないか、②吃音症状の進展によって変わっていくわが子の変容のとらえ方は父親・母親間で違いがないのではないか、③発吃や吃音症状の継続に養育態度が関係しているかどうかのとらえ方は父親・母親間で違いがないのではないか、④養育に対する罪悪感情や孤立感は父親・母親間で違いがないのではないか、⑤父親は配偶者への気遣いにおいて母親と違った思いはないのではないか、⑥専門家の介入や親の会の参加は父親・母親に異なる影響を与えないのではないか、の6つの研究仮説を設定した。

第1部は、父親・母親の各グループにインタビューで得られた「生の声」について解釈学的現

象学を理論的基盤とした質的分析を行い、両者の心情の一致点とずれを明らかにした。

第2部は、父親・母親に行った質問紙調査の回答結果について量的分析を行い、両者の心情の一致点とずれを明らかにした。

第3部は、質的分析結果と量的分析の結果を融合し、混合研究による総合考察と今後の課題を述べた。

第1部　吃音のある子どもを持つ父親・母親の養育過程に関する研究－グループ・インタビュー法による養育過程の心情と、専門家の介入、親の会参加が及ぼす影響の質的分析－（第1研究）

解釈学的現象学によるグループ・インタビューにおける質的研究（第1研究）

吃音のある子どもの父親・母親における、わが子の吃音の認識、養育過程における心情や配偶者への気遣い、それらの変容、さらに、専門家の介入や親の会参加の影響について、それぞれの「生の声」から解釈学的現象学による質的分析によって両者の一致点とずれを明らかにすることを目的とする。

研究協力者は、筆者と直接かかわりがないX県在住のAクリニックに通う吃音のある子どもの保護者夫婦4組（8名）。

方法と手順は、午前に父親、午後に母親のグループ・インタビューを筆者がファシリテーターとなって実施した。語られた音声データは録音機2台に収めノートの要約筆記を参考に逐語記録を作成した。なお、研究者の独善性を排除するために（保坂・中澤・大野木，2000）、臨床経験25年の言語聴覚士1名と教員歴30年の教員1名の研究補助者を加えた3名で分析を行った。

分析は、安梅（2001，2010）の方法に則り、1次分析として重要アイテムと、2次分析で重要カテゴリーを抽出した。そこから父親・母親の生きる有様を指す「現実存在」である「実存」を、解釈学的現象学による深い人間の洞察に基づく実存の「なぜ」を遡り考察する遡及的考察によって実存的意味（本質観取）を明らかにした（佐久川，2013）。

結果は、父親グループ2時間38分11秒、母親グループ2時間28分30秒の録音データから、筆者と研究補助者2名が共通してあげた249個を重要アイテムとして抽出し、さらに、重要カテゴリーとして「吃音の受け止め方・認識」、「罪悪感情」、「配偶者への思い」、「不安感」、「孤立感」、「専門家の影響」、「親の会参加の影響」、「吃音の理解・啓発」の8つを命名した。

第1研究の考察

5つのテーマに従って解釈学的現象学による遡及的考察（現象学的解釈）を述べる。

発吃当時の状況と心情については、吃音の情報の取捨選択や入手量、情報のとらえ方の

違いが保護者の罪悪感情に影響を与える可能性が推察された。父親に比べて母親は、養育における罪悪感情をより抱いており、自責の念にさいなまれていた。父親の方が罪悪感情を抱いていた夫婦もあった。仮説の④を十分に棄却できる結果とはならなかった。妻をサポートできなかったことへの罪悪感情と自責の念が父親達から語られた。罪悪感情の内容の違いが夫婦の温度差を生む材料の1つとなる可能性が示唆された。仮説の④は棄却できたが、罪悪感情や孤立感は父親・母親という2者の心情の枠組みでとらえるよりも吃音のあるわが子と親自身との関係をどう受け止め認識するか、そのための対処行動をどう取ってきたのか、といった観点でとらえる方が実存的解釈として妥当であると考えられる。工藤・奥住(2008)はストレス認知について、個人要因としてハーディネスと環境要因に対するソーシャル・サポートの重要性に言及しており、本研究の結果もこれを支持していた。孤立感については、夫婦の十分な話し合いや父親の相互協力の姿によって孤立感を抱かなかった夫婦があった。これは、牧野・中西(1985)の、父親の養育へのかかわりが母親の負担感と関連するという報告や、小島・田中(2007)の、父親が母親とよく話し、子どもの特性を理解していると母親が認識していることで前向きに養育に取り組める、といった報告と一致する結果となった。一方で、「疎外感」という表現で孤立感を感じていた父親や、ひとりで抱え込んでいた母親の孤立感が語られた。孤立感については仮説の④は棄却された。

配偶者への寄り添いの態度・行動については、母親を十分サポートしてこなかったことの反省と罪悪感情を父親達が抱いていたことが明らかになった。吃音のあるわが子のことよりも母親を支えることを父親達は優先して取り組んでいた。これは吃音のある子どもの父親に限らず、障がいのある子どもの父親にも共通していた(堅田, 2018b)。その背景には、男親に求められる規範が働いている可能性(藤井・青木, 2012)が考えられ、その父親の態度や行動は、母親に養育を抱え込ませず孤立感を抱かせずにいたことが明らかとなった。父親からサポートされている感覚の強い母親ほど孤立感が低く負担感も軽い(田口・伊藤, 2003)という先行研究の結果とも一致していた。一方で、養育の「隊長でいたい」と考える母親の夫は、わが子の吃音を夫婦で考えていきたいという思いが達成されず「あてにされていない」と感じていた。親の会への参加にも母親から「無理しなくていい」と言われ、孤立感を覚えていた。Allen & Hawkins(1999)は、母親のゲート・キーピング(抑制傾向)による親役割の責任を夫に譲り渡すことの抵抗感や母親が家事・養育の中心的存在でいたいという役割期待を示す心情に言及している。

専門家の影響については、父親は母親の態度や言動を通じて間接的に専門家の介入を評価し、母親と類似した評価となっている実存状況が明らかとなった。従って、仮説の⑥は承認された。玉井(1993)も、専門家による告知についての配慮として「誤った認識を親に与えないだけの基本的な専門知識を有していること」を筆頭に挙げ、専門家のかかわり方が養育に影響を及ぼすと述べている。また、専門家として、子どもの声に耳を傾け(飯村・石田, 2018; 小林, 2019; 小林・宮本, 2018; 長澤・太田, 2004)、親子で吃音の話題ができるための支援(堅田, 2018a; 太田・長澤, 2005)や、保護者の心情に寄り添えること(堅田, 2018a;堅田・

川合，2019，2020）が求められていることが明らかとなった。

親の会参加の影響については、母親達は「何でも話せる」、「気持ちを話して整理できる」、「正しい知識を拾える場」として受けとめていた。一方で、自然回復（Guitar，2006; Yairi & Ambrose，1999）を期待する母親は「この話聞きたくない」と感じていたことも明らかになった。会に参加する者の心情が、「わかちあい」の機能（岡，1999）に至るまでの段階や条件があることを示している。また、「なにか必要とされている感」の語りは、中根（2002）の、資源的支援ではなく「意味を問う」ことを支援するという視点と類似していた。そして、体験を語ることがこれまでの養育を肯定的にとらえる作用を生む可能性が示唆された。父親達にとってはグループ・インタビューの体験が親の会の意義を改めて認識する機会となった。三原・松本（2012）は、父親がわが子の問題に対して積極的になれるのは、妻からのサポートに加え、他の障がいのある子どもの家族との交流も大きな要因となっていると述べており、本研究においても同様の心情が語られていた。仮説の⑥の父親・母親に異なる影響があったことを明確にできる語りは見出せず仮説はおおむね承認された。なお、父親と母親とでは会へ参加する回数に違いがあることやメンバー同士の親しさといった実存的影響が考えられる。

発吃からの保護者自身の変容と吃音の理解・啓発では、母親は、周りへの理解・啓発を進めていく過程において自身のこれまでの養育を肯定し視野が広がったと語った。父親からは、わが子の行動から頼もしさを感じ取り、父親としてできることや周辺に目が向くようになったことが語られた。牧野・中原（1990）は、養育が父親・母親にどのような意識変容をもたらしたのかについて、父親は「責任感」に対して母親は「性格的」、「精神的影響」であったと報告した。柏木・若松（1994）は、養育に伴う親の意識は父親よりも母親により大きな変容をもたらしたと述べている。養育に伴う変容が父親・母親のどちらに大きかったのかを明らかにすることはできないが、父親の「責任感」がうかがえる語りや、養育経験が他者支援となり自身の養育を肯定できたことによる「精神的影響」についての語りは先行研究と類似した結果となった。さらに、小島・田中（2007）は、父親の養育行為のなかに母親を精神的に支える行為を促すような働きかけとともに、母親に対する教育や福祉サービスによる精神面のサポートの充実が必要であると述べている。吃音のある子どもの父親達も同様に、発吃当時はわが子の吃音に対するとらえ方に母親との温度差があったものの、養育過程で次第にその差は縮まり、身近にいる理解者として母親の精神的サポートに貢献していたことが語りによって明らかにされた。発吃当時の父親・母親の心情の形成モデルを Fig.1 に示した。

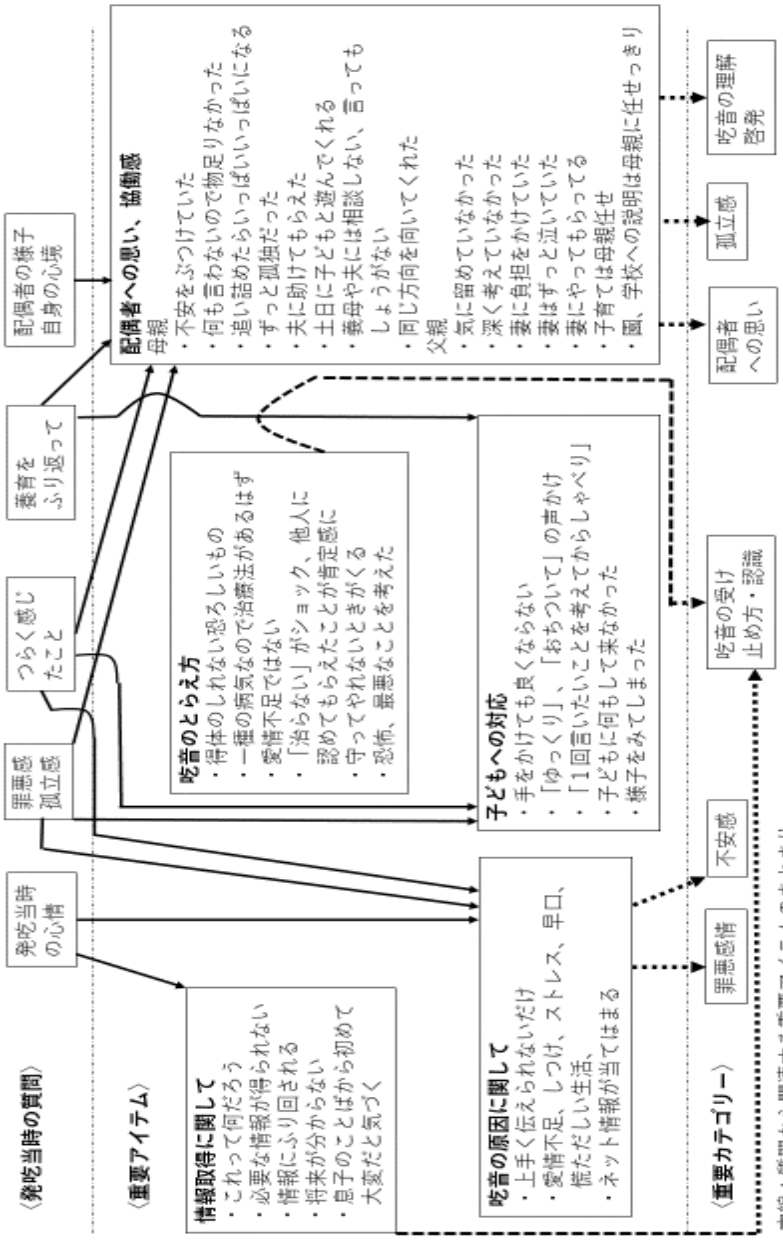

Fig.1 発吃当時の父親・母親の心情の形成モデル

第2部　吃音のある子どもを持つ父親・母親の養育態度に関する研究－質問紙調査による養育過程の心情と、専門家の介入、親の会参加が及ぼす量的分析－（第2研究）

質問紙調査による量的研究（第2研究）

本研究は、吃音のある子どもの年齢や発吃年齢、吃音症状、保護者の年齢、保護者の心情といった変数の違いを、質問紙調査により父親・母親それぞれの回答を量的に分析し、明らかにすることを目的とする。

方法と手順は、都道府県が異なる吃音のある子どもを持つ夫婦 94 組（188 名）に質問紙調査を依頼し、父親・母親・子どもの属性と、吃音症状・二次的症状の把握、養育における心情について、発吃当時をふりかえっての問いと現在の心情を問うものとに分け、さらに、専門家

の助言・指導、親の会参加による影響について4件法で回答を求めた。また、発吃当時の心情の27項目の回答結果から背景にある因子構造を明らかにした(Table 1)。さらに、因子構造と信頼性、妥当性を分析した。その後、因子構造から共分散を仮定したモデル分析を行った。また、保健師・保育士・相談員・心理士・医師等、吃音の専門家を「吃音非専門家」とし、言語聴覚士・ことばの教室教諭・吃音外来開設の医師・吃音を専門とする相談員(指導主事)を「吃音専門家」として操作的に二分し、両者の助言・指導の影響を分析した。

Table 1 発吃当時の父親・母親の心情に関する問の因子分析

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
問42 配偶者は、吃音のことで、「一緒に協力してやって行こう」と思ってくれていましたか。	**0.79**	0.04	−0.01	0.01	−0.08
問39 クラスや周りに吃音の理解啓発を進めていくことに、配偶者は賛成してくれましたか。	**0.77**	0.18	0.02	−0.05	0.06
問30 配偶者は、子どもの吃音について、話を聞いてくれましたか。	**0.71**	−0.09	−0.04	0.12	−0.11
問41 配偶者は、保育園(所)・幼稚園・学校などに理解啓発に行ってくれましたか。	**0.68**	−0.07	0	−0.06	0.13
問40 配偶者は、祖父母に、吃音のことを正しく説明してくれましたか。	**0.67**	−0.04	−0.09	0.01	0.22
問16 吃音のことでいじめられるのではないかと思いましたか。	−0.04	**0.88**	−0.03	−0.01	−0.14
問17 吃音のために引っ込み思案になるではないかと思いましたか。	−0.02	**0.87**	−0.02	0.02	0
問18 吃音のために職業選択の幅がせばまると思いましたか。	0	**0.66**	0.12	0.05	0.02
問38 吃音のことを、子どものクラスをはじめ周りに知ってもらいたいと思いましたか。	0.11	**0.45**	0	−0.06	0.18
問33 吃音のことで、自分が責められているような感じはありましたか。	−0.04	−0.05	**0.96**	−0.11	−0.01
問32 吃音のことを理解しようとしてくれる人は周りに誰もいないと感じましたか。	−0.06	0.01	**0.68**	−0.14	0.08
問37 吃音の原因は「あなたのせいではない」と、配偶者から言ってもらいたかったですか。	−0.02	0.12	**0.53**	−0.01	0.22
問22 「子どもの性格の問題で吃音が生じた」と考えましたか。	−0.05	0.03	−0.33	**0.75**	0.13
問20 「しつけの問題で吃音が生じた」と考えましたか。	0.06	0	0.15	**0.73**	−0.11
問21 「子どもにとっての何らかのストレスによって吃音が生じた」と考えましたか。	0.04	−0.06	0.13	**0.69**	−0.1
問31 吃音が生じた原因は自分の対応に問題があるからだと思いましたか。	0.14	0.04	0.36	**0.48**	−0.08
問23 「口や舌などの器官の問題によって吃音が生じた」と考えましたか。	−0.22	0.03	0.05	**0.43**	**0.51**
問24 吃音を伴った話し方を「かわいらしい話し方だ」と思いましたか。	0.1	−0.08	0.18	−0.02	**0.54**
問29 吃音は、「個性の1つだ」と思いましたか。	0.06	0.08	0	−0.03	**0.45**
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
Ⅰ	−	0.06	−0.29	−0.15	0.15
Ⅱ		−	0.34	0.45	−0.15
Ⅲ			−	0.63	−0.39
Ⅳ				−	−0.28
Ⅴ					−

第2研究の考察

185名の回答データのうちで夫婦が対になっており回答に欠損部分がない夫婦89組(178名)の回答を本調査の分析データとして扱った(回収率98.4%、有効回答率96.2%)。

発吃当時の回答結果の分析では、父親・母親間で0.1%水準が14項目、1%水準が2項目、5%水準が4項目の計20項目に有意差が認められた。吃音症状・二次症状の把握は、「連発」のみに有意差が認められ仮説の①は棄却され他は承認された。父親・母親間の会話場面や話す内容の違いが推察された。吃音の原因は、「しつけ」、「ストレス」、「自分の対応」で0.1%水準の有意差が認められ、「子どもの性格」、「器官の問題」では認められなかった。吃音のとらえ方は、「気にならない」で0.1%水準の、「ゆっくり話してほしい」、「かわいそう」に1%水準の、「いじめ」、「かわいらしい」に5%水準の有意差が認められ仮説の①は棄却された。一方、「引っ込み思案」、「職業選択」、「成長で解消」、「イライラ」、「個性」には有意差は認められず、

仮説の①は承認された。罪悪感情は、「責められている」で 0.1%水準の、孤立感は、「周りにいない」で5%水準の有意差が認められ仮説の④は棄却された。夫婦の協働感や相互協力は、「話を聞いてくれたか」、「大げさ」、「勉強したい」、「あなたのせいではない」、「吃音啓発に賛成」、「祖父母に説明」、「理解啓発に行ったか」、「一緒に協力してやって行こう」で 0.1%水準の有意差が認められ、仮説の⑤は棄却された。また、「話題にしない」に5%水準の有意差が認められた。

現在についての回答では、父親・母親間で 15 項目の有意差が認められ、発吃当時の 20 項目と比較するとずれが減少していた。吃音症状・二次症状の把握は、「連発」に 0.1%水準の、「言い換え」で 1%水準の有意差が認められ仮説の①は棄却されたが、他の項目では仮説は承認された。言い換えの頻度が増加していく特性(Guitar, 2006)の影響が考えられる。吃音の原因は、「性格」のみ5%水準の有意差が認められ仮説の②、仮説の③が棄却された。吃音のとらえ方は、「成長で解消」、「ゆっくり話す」で1%水準の、「職業選択」で5%水準の有意差が認められ仮説の①②とともに棄却された。罪悪感情と孤立感は、罪悪感情の「責められている」と孤立感の「周りにいない」で有意差は認められず仮説の④は承認された。夫婦の協働感、相互協力は、「聞いてくれるか」、「勉強をしたい」、「知ってもらいたい」、「祖父母に説明」、「吃音啓発に行ってくれたか」、「一緒に協力してやって行こう」の回答で 0.1%水準の、「大げさ」、「あなたのせいではない」の回答で0.1%水準の、「理解啓発に賛成」で5%水準の有意差が認められた。なお、「話題にしない」は有意差が認められなかった。現在においても、母親は父親に比べて協働感、相互協力をより求めていることも明らかとなり、仮説の②は棄却され、「家庭内で話題にしない」以外は仮説の⑤も棄却された。

発吃当時の心情に関する回答の因子構造の分析では、「吃音の理解・啓発に向けての配偶者との協働」、「わが子の受け止め方」、「孤立感と罪悪感情」、「原因の受け止め方」の4つの因子を抽出した。発吃当時と現在の回答比較では、4因子すべてに有意差が認められた。

専門家による助言・指導の影響は、専門家の助言・指導を受けていたのは 154 名(父親 67 名、母親 87 名)で研究協力者全体の 87%であった。父親・母親のいずれかが吃音非専門家の助言・指導を受けた場合(父親 10 名、母親 36 名)の影響の分析では、「あなたのせいではないと言ってくれたか」の回答のみ父親・母親間で有意差が認められたことから仮説の⑥は棄却された。夫婦で吃音非専門家の助言・指導を受けた場合の影響の分析では、「相談機関に行くことに、配偶者は賛成してくれましたか」の回答に父親・母親間に有意差が認められた。父親が専門家を訪ねようとする態度そのものが母親にとって協働感や相互協力を感じ取れる要因となっていた。吃音非専門家または吃音専門家のいずれかから夫婦が助言・指導を受けた場合(40 家族)は、「相談機関に行くことに、配偶者は賛成してくれたか」、「助言・指導はあなたにプラスの影響を与えたか」、「吃音啓発の動きを始めさせるきっかけになったか」の3項目において有意差が認められたことから仮説の⑥は棄却された。吃音非専門家から助言・指導を

受け、後に吃音専門家の助言・指導を受けた場合の父親・母親が受けた影響の分析結果では、「吃音の相談に行くことに抵抗感があったか」以外は全ての項目で有意差が認められた。

親の会参加による影響は、研究協力者全体の 51%にあたる 91 名（父親 24 名、母親 67 名）が親の会に参加していた。すべての回答で意差は認められなかったことから仮説の⑥は承認された。

第3部　総合考察と今後の課題

混合研究による考察

本研究は、吃音のある子どもの父親・母親の心情を理解するための一端を明らかにしたものであり、今後の保護者支援に活用できる資料の1つとなり得た。そして、吃音臨床の場において活用されることが期待できる。以降、混合研究の考察を述べる。

発吃当時の状況とその後の父親・母親の心情の変容は、質的分析において、保護者がどの情報に注目し、どう活かすかの違いが心情に影響を与えていた。また、父親の協働感・相互協力によって母親は孤立感を抱かなかった。量的分析では、「連発」のみに有意差が認められ、会話場面や話の内容の違いが推察された。孤立感・罪悪感情は父親よりも母親がより抱いていたこと、父親達の罪悪感情がわが子の養育に対して感じる母親の罪悪感情とは異なり、母親をサポートできなかったことによるものであった。これは先行研究（田中，1996; 小島・田中，2007; 堅田，2018b）の結果とも類似していた。母親と養育を協働できない父親特有の孤立感も浮かびあがった。吃音の理解・啓発に向けての配偶者との協働は、親の会で話す母親達の経験談が他者支援となり、これまでの養育を肯定し、多様な人との共生社会を推進していく担い手としての視野が広がっていった。父親達は、わが子の姿から周辺の環境に目が向くようになった。母親達の気遣いとは異なる父親達の協働感や相互協力が吃音の理解・啓発活動のなかにも変容があったことが浮き彫りとなった。量的分析では、父親に比べて母親は養育の過程で心情の変容がより大きかったことが示された。特に、吃音の原因と吃音のとらえ方に関する項目に有意差が認められた。なお、将来の不安は軽減し、楽観視も軽減していた。「どもらずに話してほしい」、「気にならない」、「イライラ」は、父親に有意差がなく母親には有意差が認められた。日頃わが子と関わる時間の違い、吃音の正しい理解を取得する総量の違いが考えられる。養育のなかの罪悪感情は母親において軽減されていた。配偶者に対して「話を聞いてくれるか」の項目で有意差はなく、配偶者が話を傾聴しようしてきたことが現在も継続されていることが示された。吃音の理解・啓発に伴う夫婦の協働感や相互協力は、養育の過程において配偶者が変容したことを夫婦が互いにとらえていたことが示された。また、母親が父親に対して協働感や相互協力を求める意向を発吃当時から持ち続けていたことや、父親の変容を母親がより感じ取っていたことが明らかになった。父親は養育の過程で母親に協働感をより感じるように変容しており、両者のずれは明らかとなった。親の会参加による影響は、理解者が得られた安堵感、自然回復を願う 1 人の母親の苦しかった時期が語られ、親の会の意義が明らかとな

った。量的分析では親の会参加による影響の違いはなかった。親の会が保護者支援の一形態(久保・菊池，2018; 餅田，2018)となる可能性がうかがえた。

今後の課題

以下の8点を今後の研究課題として引き続き研究を継続していきたい。

1)研究協力者の拡大と属性の違いによる検討

2)子どもの属性による違いの分析

3)父親・母親の属性による違いの分析

4)専門家の属性による違いの分析

5)親の会の形態、プログラム等の違いの分析

6)グループ・インタビュー法の精査

7)研究協力者の家庭環境の違いによる分析

8)質問紙の精査

引用文献

Allen, S. M., & Hawkins, A. J. (1999) Maternal gatekeeping: Mother's belief and behaviors that inhibit greater father involvement in family work. *Journal of Marriage and Family*, 61, 199-212.

安梅勅江 (2001) ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法－科学的根拠に基づく質的研究法の展開. 医歯薬出版, 54-55.

安梅勅江 (2010) ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法Ⅲ/論文作成編－科学的根拠に基づく質的研究法の展開. 医歯薬出版, 17-20.

有田愛莉・平野美千代 (2020) 吃音がある子どもに対する関りの中で親が抱く思い－子どもへの支援的な関りをとおして－. 日本公衆衛生看護学会誌, 9(2), 72-80.

Creswell, J. W. & Clark, V. L. P. (2011) *Designing and conducting mixed methods research* (2nd ed). Sage Publications, Thousand Oaks, California.

Darley, F. L. (1955) The relationship of parental attitudes and adjustments to the development of stuttering. In W. Johnson, & R. R. Leutenegger (Eds), *Stuttering in children and adults*, University of Minnesota Press, Minneapolis.

Goodstein, L. D. (1956) MMPI profiles of stutterers' parents: A follow-up study. *Journal of Speech and Hearing Disorders*, 21, 430-435.

Goodstein, L. D. & Dahlstorm, W. G. (1956) MMPI difference between parents of stuttering children and nonstuttering children. *Journal of Consulting Psychology*, 20, 365-370.

Guitar, B. (2006) *Stuttering: An integrated approach to its nature and treatment* (3rd

ed.). Lippincott Williams & Wilkins, Baltimore, Maryland.Johnson, W. & associates (1959) Studies in the psychology of stuttering: XIII. A statistical analysis of the adaptation and consistency effects in relation to stuttering. *Journal of Speech Disorders*, 4, 79-86.

原 由紀 (2005) 幼児吃音. 音声言語医学, 46, 190-196.

藤井未紗子・青木香保里 (2012) 障害児育児における父親の役割－家庭科における障害者－. 愛知教育大学家政教育講座研究紀要. 42, 99-114.

保坂 亨・中澤 潤・大野木裕明 (2000) 心理学マニュアル面接法. 北大路書房, 136-137.

飯村大智・石田 修 (2018) 吃音のある児童が学校・家庭で周囲に求める対応や支援に関する要望について. 音声言語医学, 59, 318-326.

Johnson, W. & associates (1959) *The onset of stuttering: Research findings and implications.* University of Minnesota press, Minneapolis, Minnesota.

柏木恵子・若松泰子 (1994) 「親となる」ことによる人格発達:生涯発達的視点から親を研究する試み.発達心理学研究, 5(1), 72-83.

堅田利明 (2018a) 「吃音」の正しい理解と啓発のために－キラキラを胸に. 海風社.

堅田利明 (2018b) 障がいのある子どもを持つ夫婦の養育における協働感・相互協力の一致とずれ. ろう教育科学, 60(3), 99-119.

堅田利明・川合紀宗 (2019) 吃音のある子どもを持つ保護者の養育態度に関する研究－父親・母親の心情のずれと、専門家受診、親の会参加が養育に及ぼす影響－. 音声言語医学, 60(4), 332-344.

堅田利明・川合紀宗 (2020) 吃音のある子どもをもつ保護者の養育態度に関する研究－グループインタビュー法による養育過程の心情と、専門家の介入、親の会参加が及ぼす影響の質的分析－. 音声言語医学, 61(2), 140-157.

川合紀宗 (2010) 吃音に対する認知行動療法的アプローチ. 音声言語医学, 51, 269-273.

Kelly, E. & Conture, E. (1992) Speaking rates, response time latencies, and interrupting behaviors of young stutterers, nonstutterers, and their mothers. *Journal of Speech and Hearing Research*, 35, 1256-1267.

見上昌睦 (2008) 吃音児に対する通常の学級の教師, 保育所の保育士による配慮および支援. コミュニケーション障害学, 25(2), 156-163.

小林宏明・川合紀宗 (2013) 特別支援教育における吃音・流暢性障害のある子どもの理解と支援. 学苑社.

小林宏明・宮本昌子 (2018) 吃音のある小学生の発話・コミュニケーション活動と小学校生活への参加の質問紙調査. 音声言語医学, 59, 158-168.

小林宏明 (2019) イラストでわかる子どもの吃音サポートガイドー1 人ひとりのニーズに対応する環境整備と合理的配慮-. 合同出版.

小島未生・田中真理 (2007) 障害児の父親の育児行為に対する母親の認識と育児感情に関する調査研究.特殊教育学研究, 44(5), 291-299.

久保牧子・菊池良和 (2018) 吃音のある子どもの母親と幼稚園教諭への調査からー親の会を立ちあげてー. コミュニュニケーション障害学, 35(2), 80-84.

工藤真由・奥住秀之(2008) 障害児をもつ親のストレスに関する文献検討. 東京学芸大学紀要, 59, 235-241.

牧野カツ子・中西雪夫 (1985) 乳幼児をもつ母親の育児不安ー父親の生活および意識との関連. 家庭教育研究所紀要, 6, 11-24.

牧野暢男・中原由里子 (1990) 子育てにともなう親の意識の形成と変容ー調査研究ー. 家庭教育研究所紀要, 12, 11-19.

三原博光・松本耕二 (2012) 障害者の父親の生活意識の検証ー障害児の年齢, 出生順位, 妻の仕事の有無に着目してー. 社会福祉学, 53(2), 108-118.

餅田亜希子 (2018) 吃音外来の開設と地域における啓発活動の連動ー長野県東御市からの発信ー. コミュニケーション障害学, 35(2), 85-89.

Meyers, S. C. & Freeman, F. J. (1985a) Interruptions as a variable in stuttering and disfluency. *Journal of Speech and Hearing Research*, 28, 428-425.

Meyers, S. C. & Freeman, F. J. (1985b) Mother and child speech rate as a variable in stuttering and disfluency. *Journal of Speech and Hearing Research*, 28, 436-444.

Morgenstern, J. J. (1956) Socio-economic factors in stuttering. *Journal of Speech and Hearing Disorders*, 21, 25-33.

長澤泰子・太田真紀 (2004) 教育臨床におけるコミュニケーション分析の試みⅡー教師の行動が子どもの行動に及ぼす影響ー. 日本橋学館大学紀要, 3, 3-13.

中根成寿 (2002)「障害をもつ子の親」という視座ー家族支援はいかにして成立するかー. 立命館産業社会論集, 38(1), 139-164.

岡 知史 (1999) セルフヘルプグループーわかちあい・ひとりだち・ときはなちー. 星和書店.

太田真紀・長澤泰子 (2005) 学童期における吃音児の自尊感情の発達に関する研究ー学校生活に関わる能力と親と吃音について話す経験との関係ー. 特殊教育学研究, 43(4), 255-265.

坂田善政 (2011) 小児の吃音. *Journal of Otolaryngology, Head & Neck Surgery,* 27 (8), 1195-1199.

佐久川肇 (2013) 質的研究のための現象学入門ー対人支援の「意味」をわかりたい人へー(第 2 版). 医学書院.

鈴木夏枝・小澤恵美 (2001) 幼児吃音の臨床.アドバンズシリーズ/コミュニケーション障害

の臨床 2 吃音．日本聴能言語士協会講習会実行委員会編集，2，49-83.
田口悦津子・伊藤良子 （2003） 知的障害児をもつ両親の育児感情とサポート度との関連についての検討．東京学芸大学紀要，第 1 部門，教育科学，54，329-338.
玉井真理子 （1993）「障害」の告知の実態－母親に対する質問紙調査の結果および事例的考察－．発達障害研究，15(3)，223-229.
田中正博 （1996） 障害児を育てる母親のストレスと家族機能．特殊教育学研究，34(3)，23-33.
Thompson, L., & Walker, A. J. (1989) Gender in families: Women and men in marriage, work, and parenthood. *Journal of Marriage and Family*, 51, 845-871.
Yairi, E. （1997） Home environment and parent-child interaction in childhood stuttering. in R. F. Curlee & G. M. Siegel (Eds.), *Nature and treatment of stuttering: New directions* (2nd ed.). Allyn & Bacon, Boston, Massachusetts, 24-48.
Yairi, E. & Ambrose, N. G. （1999） Early childhood stuttering I: Persistency and recovery rates. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 42, 1097-1112.
Zenner, A. A., Ritterman, S, I., Bowen, S. K. & Gronhovd, K. D. (1978) Measurement and comparison of anxiety levels of parents of stuttering, articulatory defective, and normal speaking children. *Journal of Fluency Disorders,* 3(4), 273-283.